日本語学 5
2005. MAY
VOL.24

特集 比喩の世界

認知心理学から見た比喩

楠見 孝

1 はじめに—比喩の種類と知識—

ここでは、比喩にはどのような種類があるか、どのように理解されるか、そしてどのような働きを持つかについて、認知心理学の理論や研究に基づいて明らかにする。

主な比喩には、隠喩・直喩、提喩、換喩がある。比喩の代表である隠喩と直喩は、異なる知識領域の主題とたとえる概念を、類似性に基づいて結びつけた比喩である（例：少女は花のようだ）。一方、換喩は、同じ知識領域の時間的空間的隣接性に基づく比喩（例：ポニーテールでその髪型の少女を指す）、提喩は同じ領域のカテゴリ階層関係に基づく比喩である（例：花で桜を指す）。

ここでは、比喩理解を、主題とたとえる語の意味関係を発見する過程として考える。図1で示すように、隠喩、換喩、提喩を支える意味関係は、それぞれ類似性、隣接性、上位—下位関係と考える（瀬戸 一九八六）。さらにそれぞれは、情緒・感覚的意味、シーン・スクリプト的意味、カテゴリ的意味に関する知識に基づいている（楠見 一九九五）。

2 類似性に基づく比喩—隠喩と直喩—

隠喩と直喩は、対象の間の類似性認識に基づいて成立する。直喩が「ようだ」「みたいだ」などの比喩の指標があるのに対して、隠喩は比喩指標がない比喩である。別の見方をすれば、直喩は比喩指標があるため、かけ離れた対象の間でも作者の意志によって結びつけることができるのに対して、隠喩は、比喩指標がないため、慣用化しているか、対象間に類似性あるいはそれを際だたせる文脈がないと読者には理解しにくい。

隠喩と直喩は代表的な比喩として、多くの研究がおこなわれてきた。その種類は大きく三つに分けることができる。

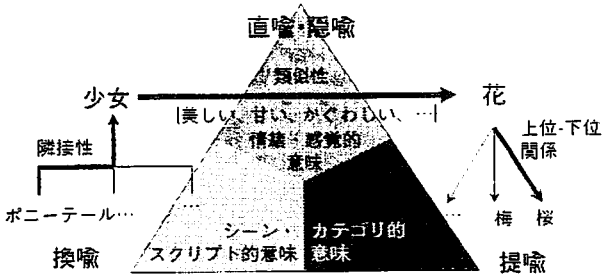
[1] 特徴比喩

(1) 心は風のない池か沼の面のようにただどんよりと澱んでいた。（有島武郎『或る女』）

特徴比喩の理解は、主題とたとえる概念の特徴集合を照合し、共有特徴や示差特徴を発見する過程である。たとえば、(1)文を短縮して「AはBだ」形式にした「心は沼だ」では、主題「心」とたとえる概念「沼」の間の比較によって、共有特徴「深い、どろどろした、…」を発見する過程として捉えることができる（特徴比較理論）。ここで、オートニー（Ortony 1979）は、共有特徴「深い、…」の顕著性が「心」に比べて「沼」において高いという落差が比喩性を引き起こす点に着目している（顕著性落差モデル）。

特徴比喩の認知過程は、図2に示すようにカテゴリ的意味空間と情緒・感覚的意味空間における二通りの類似性認知に基づいて考えることもできる（楠見 一九八九）。図2aのカテゴリ的意味空間は、比喩を構成する語の辞書的な意味での類似性に基づくカード分類データに多次元尺度解析とクラスタ分析をおこなったものである。一方、図2bとb′の情緒・感覚的意味空間は、比喩を構成する単語をSD法の評定させた結果である。たとえば、「心は沼だ」という比喩を理解する時は、第一に、図2aに示すように主題「心」とたとえる語「沼」のカテゴ

図1 比喩理解を支える3種の意味と関係
（瀬戸 1986 の認識の三角形を改変）



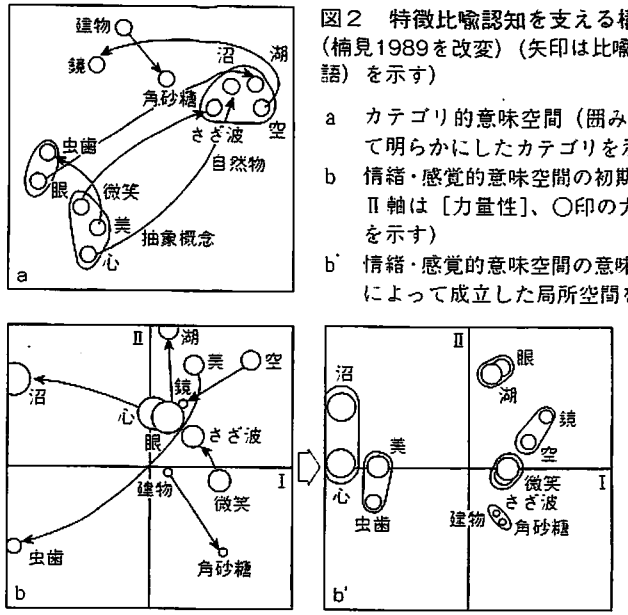


図2　特徴比喩認知を支える構成語の意味空間（楠見1989を改変）（矢印は比喩の例（主題→たとえる語）を示す）

a　カテゴリ的意味空間（囲みはクラスタ分析によって明らかにしたカテゴリを示す）

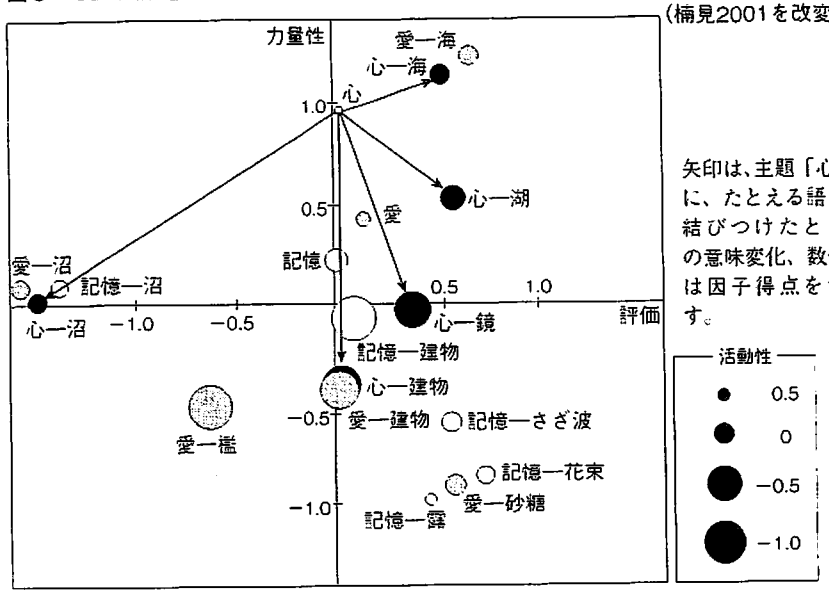
b　情緒・感覚的意味空間の初期状態（Ⅰ軸は［評価］、Ⅱ軸は［力量性］、○印の大きさはⅢ軸［活動性］を示す）

b'　情緒・感覚的意味空間の意味変化（囲みはメタファによって成立した局所空間を示す）

リ的意味空間における類似性を判断した結果、両者はカテゴリが異なるため、字義通りの類似性を述べた文ではないと判断できる。ここでカテゴリの不一致が大きいほど斬新な比喩と評価されていた。第二に、「心」と「沼」の情緒・感覚的意味空間における両者の意味的距離は、単語同士で評価させた時は大きいが（図2b）、比喩文の中で評価させた時は、両者の意味は接近していることがわかる（図2b'）。すなわち、比喩文のなかで両者を結びつけることによって、共有特徴〔どろどろした、暗い、…〕が発見されて、「心」の意味は「沼」のマイナスの「評価」に引き寄せられるようにして、両者の類似性が高まったことを示している。図2bと図2b'を比べると文学作品上の比喩「美は虫歯だ」「微笑はさざ波だ」「眼は湖だ」のいずれにおいても、同様の形で、比喩主題の意味は、たとえる語の意味に近づく形で意味的類似性が高まっている。そして、情緒・感覚的意味における類似性が高いほど比喩の理解しやすさが高まり、斬新さと理解しやすさがともに高い文が良い比喩と評価された（Kusumi, 1987; 中本・楠見 二〇〇四）。

直喩は隠喩に比べると、主題とたとえる語の類似性が低くても比喩指標「ようだ」などを用いて結びつけることができる。ただし、あまりにも類似性が低いと読者の

図3　SD法評定に基づく情緒・感覚的意味空間における比喩主題の意味変化（楠見2001を改変）



矢印は、主題「心」に、たとえる語を結びつけたときの意味変化、数値は因子得点を示す。

理解は困難になる。そこで、(1)文のように、両者の類似性を示す比較の根拠「ただどんよりと澱んでいた」などを顕在化させる文脈を用いる。楠見（一九八五）の実験では、たとえば、「心は沼だ」という比喩に比べて共有特徴を顕在化させた「深い心は沼だ」「心はどろどろした沼だ」の方が、理解しやすいことを見いだしている。特徴比喩、とくに、それが隠喩形式の場合はカテゴリの包含関係に基づいて説明できる（類包含理論、Glucksberg 2003; Glucksberg & Keysar 1990）。たとえば、隠喩「心は沼だ」は、主題「心」がたとえる概念「沼」を典型例とする〔どろどろしたもの〕カテゴリに包含される陳述として考えることができる（楠見 一九八八b）。図3は、「心」が単独の場合のSD法評定結果と「心は沼（海、湖、鏡、建物）のようだ」で評定した場合の、情緒・感覚的意味空間上での布置を示している。ここで示したように、「心」は単独では、「評価」の次元ではほぼ真ん中の中立的な意味であるが、「沼」でとらえることによって、一どろどろした、…〕特徴が顕在化して主題の意味が「評価」の次元でマイナスの方向に変化する。一方、「心」を「湖」でたとえれば、〔美しい、澄んだ、…〕といったプラスの評価の特徴が顕在化する。これは、「愛」や「記憶」を「沼」「湖」でたとえた場合でも同じ効果が得られる

ことを示している。たとえば、「沼」でたとえた「心」「愛」「記憶」は、意味空間内で「評価」のマイナス評価において近接した布置をとっており、比喩的な「沼」カテゴリに入っているといえる（楠見 一九九四）。

[2] 関係・構造比喩

関係比喩は、「眼は心の窓である」のように、四項類推における関係の類似性［眼：心：：窓：（家）］（眼と心の関係は窓と家の関係と似ている）の発見がある。

(2) 言葉というものは正しい使いかたをすれば、ちょうどX光線のようになり得るんだよ。どんな物の中にも突入するのだよ。読む人の心に突き刺すんだよ。

（ハックスリー　松村達雄訳『すばらしい新世界』）

構造比喩の理解は、(2)文では「X光線がどんな物にも突入する関係は、言葉が読む人の心に突き刺す関係に等しい」と理解することができる。主題である言葉の領域にX光線の領域を写像することによって、両者間に構造的類似性（同型性）が成立している。構造写像理論（Gentner 1983）では、比喩理解を両者間に同型な関係や構造を発見する過程として考える。

さらに、構造写像理論を展開した構造配列理論では、主題とたとえる語間の関係や構造の対応づけを最大化するように特徴や特徴間関係を配列する過程に着目している（Gentner & Wolff 1997）。たとえば、「心は沼だ」を理解する時には両者とも「深い」という類似性を発見するだけでなく、「引き込む」という関係に基づいて、「沼は足を引き込む、心は魂を引き込む」といった配列可能な差異が類似性に寄与している（栗山・楠見 一九九九）。

また、共感覚的比喩（例：甘い音、うるさい味）は、異なる感覚領域の感覚形容語の意味の構造的な写像としてとらえることもできる（楠見 二〇〇五a）。

[3] 概念比喩

(3) 学問は常により高く建物の階を築き上げ、古い建物を加工し、掃除し、改修する。

（ニーチェ　渡辺二郎訳『哲学者の書』）

(3)文のような学問や理論を建物でたとえる比喩は慣用的に使われ、「土台」「基盤」「骨組み」「柱」「崩壊」などのように、体系的な説明を可能にしている。こうした

比喩は慣用的ではあるが、字義通りの言葉の単なる代置ではない。他の知識領域の概念を用いて、対象となる概念に構造を与える働きを持つ。これを概念比喩と呼ぶ。たとえば、「愛は戦いである」ととらえる概念比喩は、「アタック」「争い」「略奪」「征服」といった愛に関する比喩を体系的に生みだし、「愛」についての記述や説明を豊かにしている（Lakoff & Johnson 1980）。こうした、「愛」の概念比喩の背後には、「愛」について人がどのような経験をして、信念を持っているかが反映されている（楠見 二〇〇二）。さらに、読者の信念や行動に影響を及ぼすと考えられる。

概念比喩は言語と思考に浸透しているが、その起源には、身体感覚的な経験がある。身体経験や知覚・運動パタンは抽象化され、イメージスキーマとして、概念比喩を支えている。たとえば、「喜びに沸く」「悲しみに沈む」といった感情の慣用比喩表現は、喜ぶ時には飛びはね、悲しいときには、肩を落とし、寝込んでしまうという身体的経験に対応している。これらの身体的経験が反復抽象化され、イメージスキーマ（喜び（悲しみ）は上（下））が形成されると考える（Lakoff 1987）。大学生九六人に、「喜び」「悲しみ」などの感情概念をイメージスキーマに関わる「上―下」「内―外」などのSD法で評定させると、「喜びは上」（八九％）、「悲しみは下」（九五％）、「喜びは外」（七二％）、「悲しみは内」（八九％）の一致度は高いものであった（楠見 一九九三）。

さらに、「喜びがあふれる、悲しみに沈む」といった慣用比喩表現は、心や胸を入れ物として捉え、感情をその中の液体でとらえるイメージスキーマに基づく比喩といえる。大学生の被験者に「喜び」「怒り」などの感情を表現するイメージ図を描いてもらうと、こうした容器や液体のイメージスキーマに基づく描画の頻度が高かった（楠見 一九九三）。

また、ある種の概念（時間、量など）は、前後や上下にかかわる慣用的な表現を経由しないで、空間的表象（前―後、上―下のイメージスキーマ）を喚起することが示されており、慣用比喩と思考、身体経験との関連に対する証拠となっている（Boroditsky & Ramscar 2002; 中本 二〇〇〇）。

3 隣接関係に基づく比喩―換喩―

(4) 四角が云うと、（略）…胡麻塩がしきりに胡麻塩頭を掻く。（略）…禿は（略）…残念がっている

（夏目漱石『野分』）

換喩は、ある対象を指示するために、それと隣接する対象を用いる慣用的比喩である。(4)文では、「四角」「胡麻塩」はそうした目立つ特徴をもつ人を指す。主人公にはこれらの人物の名前を知らず、会話に関心をもてないため、顕著な外見上の特徴だけが、目に入ってくる。このように換喩は、知覚的シーンにおける顕著な部分的特徴（頭の特徴）を用いてそれと隣接する全体（人）をさす。その関係は、大きく次の二つに分かれる。

[1] 顕著な対象で空間的隣接対象を指す

たとえば、図1に示すように、部分で全体（「ポニーテール」でその髪型の「少女」）を指す。そのほかにも、私たちが共有する世界知識における隣接関係に基づいて、容器で内容物（「ボトル（をあける）」でそれに入った「酒」）、場所や建物で機関（「永田町、首相官邸」で「政界や日本政府」）、地名で産物（「ボルドー」で「ワイン」）を指すものがある。

[2] 顕著な事象で時間的隣接事象を指す

たとえば、結果で原因（「涙を流す」で「泣く」）、原因で結果（「ハンドルを握る」で「自動車を運転する」）、作者で著作（「三島（を読む）」で「その著作」）、楽器で演奏者（「フルート」で「フルートを吹く人」）を示す。こうした換喩の理解や生成は、文脈情報と知識（場面やその時間的連続であるスクリプト）に支えられている（楠見 一九九五）。

4 上位―下位関係に基づく比喩―提喩―

(5) パンに不自由しながら人は恋を語れるでしょうか
（アベ・プレヴォー『マノン・レスコー』）

(6) 花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間に
（小野小町『古今集』）

提喩はカテゴリの階層関係に基づく比喩である。大きく分けると二つの種類がある。第一は、代表的あるいは典型的な事例でカテゴリ全体を指すものである。たとえば、(5)文では「パン」はその上位カテゴリである「食べ物」を指す。第二は、カテゴリで代表的な事例を指すものである。たとえば、(6)文において、「花」は古来日本人にとっては典型的である「桜」を指す。このように提喩は、カテゴリに関する知識の包含関係と典型性の構造に依拠している（楠見 一九九五）。また、この考え方は、先に述べた特徴比喩を特徴カテゴリに基づく包含関係と

みなす類包含理論と結びつく。つまり特徴隠喩は、提喩に分解できると考えることもできる（groupe μ 1970）。

換喩はシーンやスクリプトの研究、提喩はカテゴリの研究との関連は、あるが、これらを正面から取り上げた心理学的研究は、ギッブスの研究（Gibbs 1994）などがあるが、数は少ない。

5 比喩の機能

比喩の主な機能を、比喩の認知心理学的研究に基づいて、以下の三つに分けて考えていく。

[1] 伝達機能

伝達機能は、文章の表現において、相手の既有知識を利用した比喩を用いて、わかりやすい記述や説明をおこなうことである。たとえば、「教育は種まきだ」という比喩を用いて、教育の営みについて考え、相手に伝えることができる。さらに、比喩は、言葉通りに表現できない意味や暗黙知の伝達、簡潔あるいは婉曲的なコミュニケーション（たとえば皮肉、ことわざ）において利用されている。

簡潔な生き生きした比喩は、記憶にも残りやすい。「船頭多くして船山に上る」などのことわざは、鮮明な場面イメージを読者に与え、その背後にある抽象的な教訓を伝達し、また記憶に残りやすくしている。

[2] 概念構造化機能

第二は、抽象概念を構造化する機能である。認知言語学者レイコフら（Lakoff 1987; Lakoff & Johnson 1980）は、比喩が単なる言葉の綾ではなく、概念に構造を与え、日常生活における思考・言語や行動に遍在していることに着目している。こうした概念比喩、たとえば、前述したように、「愛は戦いだ」は、「愛」の概念領域に「戦い」の概念領域を写像することにより、「争う」「奪う」「勝つ」といった体系的な記述や説明を可能にし、行動の指針にもなっている（楠見 二〇〇二）。また、慣用的な概念比喩（議論は建築物だ）を明示した場合はそうでない場合に比べて、後続のテキストの読解時間を短縮し、主題に関する質問に対する反応時間を短縮する効果があった（平・楠見 二〇〇四）。

[3] 創造・詩的機能

創造・詩的機能は、比喩がカテゴリの異なる対象を結びつけ、新鮮でインパクトのある発想や表現を生み出す

働きである。比喩による創造や詩的な表現は、文学の創作や鑑賞において重要な役割を果たしている（楠見 二〇〇五b、二〇〇五c）。文学以外でも広告において、比喩は効果的に使われている。(7)、(8)文は、ある広告賞を受賞したコピーである。

(7) 花は人を殺さない。ハートを殺す。 （花事業）

(8) 人は処方せんを持って生まれてくる。 （医療用DNAチップ）

(7)文のコピーの背後には、「拳銃は人を殺すが、花はハートを殺す」（拳銃：花：：人を殺す：ハートを殺す）というように構造配列理論で説明できる関係比喩がある。「花」と「殺す」という一見結びつかないものが、「ハートを殺す」という関係を入れることによって結びついている。(8)文のコピーは多くの人がなじみのないDNAチップが、患者の体質に適した薬や治療法を選ぶためのDNA解析に必要であることを、処方せんとの類推で示している。どちらも新しい事業を宣伝するために、花を贈ることやDNAチップの役割を人々に伝え、記憶に残るようにしている。

6 まとめ

以上述べてきたように、認知心理学では、隠喩や直喩の理解を、主題とたえる語の特徴・関係の比較、さらに構造の配列と写像に基づいて説明してきた。そして、近年は、アドホックな比喩的カテゴリの形成を重視するようになってきた。

これらの考え方を統合する説として、比喩の履歴説（Bowdle & Gentner 2005）は、新奇な比喩から死喩に至る履歴をつぎのように説明している。①新奇な比喩の段階では、主題とたとえる語の比較や構造配列によって、比喩的カテゴリが抽象化される。②この比喩が頻繁に使用され、慣用化した段階では、主題と比喩的カテゴリは直接結びつく。③さらに、慣用化が進んだ死喩の段階では、主題は比喩的カテゴリの結びつきが強まり、たとえる語の字義通りの意味は顕在化しなくなる。こうした比喩履歴の考え方は、新奇比喩を主に研究対象にしてきた認知心理学的研究と慣用比喩を研究対象にしてきた認知言語学的研究を統一的に説明することになる。こうした慣用化による比喩的カテゴリの形成は、概念比喩、イメージスキーマ、提喩とカテゴリ知識、換喩とスクリプト的知識によって支えられている。また、比喩の機能を

比喩の履歴に照らして見ると、慣用化によって、新奇比喩のもつ詩的機能は弱まるが、概念の構造化が進み、伝達機能は高まると考える。

付記
京都大学教育学研究科COE研究員中本敬子さんには、草稿に対して貴重なコメントを頂きました。また、同大学院生平知宏君、同文学部生中谷求仁さんにもコメントを頂きました。記して感謝を表します。

文献

Boroditsky, L. & Ramscar, M. (2002) The roles of body and mind in abstract thought. *Psychological Science*, 13, 185-189.
Bowdle, B. F. & Gentner, D. (2005) Career of Metaphor. *Psychological Review*, 112, 193-216.
Gentner, D. (1983) Structure-mapping: A theoretical framework for analogy. *Cognitive Sciences*, 7 (2), 155-170.
Gentner, D. & Wolff, P. (1997) Alignment in the processing of metaphor. *Journal of Memory & Language*, 37 (3), 331-355.
Gibbs, R.W.Jr. (1994) *The poetics of mind : figurative thought, language, and understanding*. Cambridge University Press.
Glucksberg, S. (2003) The psycholinguistics of metaphor. *Trends in Cognitive Sciences*, 7, (2), 92-96.
Glucksberg, S. & Keysar, B. (1990) Understanding metaphorical comparisons: Beyond similarity. *Psychological Review*, 97, 3-18.
le groupe μ (1970) *Rhétorique Générale*. Paris: Editions du Seuil.［佐々木健一・樋口桂子訳（一九八一）『一般修辞学』大修館書店］
栗山直子・楠見孝（一九九九）「比喩の類似性認知に及ぼす類似性・差異性の影響：構造配列理論を用いた検討」（『日本心理学会第六三回大会発表論文集』六八五頁）
楠見 孝（一九八五）「比喩文の理解における語句間の類似性：意味特徴の顕著性が比喩理解に及ぼす効果」（『心理学研究』五六巻、二六九―二七六頁）
Kusumi, T. (1987) : Effects of categorical dissimilarity and affective similarity of constituent words on metaphor appreciation. *Journal of Psycholinguistic Research*, 16, 577-595.
楠見 孝（一九八八b）「カテゴリとメタファ」（『数理科学』二九七号、一〇―一四頁）
楠見 孝（一九八九）「メタファの認知モデル」（『数理科学』三〇七号、三九―四二頁）
楠見 孝（一九九三）「感情のイメージ・スキーマモデル：比喩表現を支える概念構造」（『日本認知科学会第一〇回大会発表論文集』五八―五九頁）
楠見 孝（一九九四）「比喩理解における主題の意味変化：構成語間の相互作用の検討」（『心理学研究』六五巻、一九七―二〇五頁）
楠見 孝（一九九五）『比喩の処理過程と意味構造』（風間書房）
楠見 孝（二〇〇一）「比喩理解：なぜわかるのか？ どうして使うのか？」（森敏昭（編）『おもしろ言語のラボラトリー』北大路書房）

楠見　孝（二〇〇二）「比喩生成を支える信念と経験：愛の比喩の背後にある恋愛規範と経験」（『日本心理学会第六六回大会発表論文集』八一一頁）
楠見　孝（二〇〇五a）「心で味わう：味覚表現を支える認知のしくみ」（瀬戸賢一ほか『味ことばの世界』海鳴社）
楠見　孝（二〇〇五b）「文芸の心理：比喩と類推から見た三島由紀夫の世界」（子安増生編『芸術心理学のかたち』誠信書房）
楠見　孝（二〇〇五c）「心理学と文体論：比喩の修辞効果の認知」（中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子編『表現と文体』明治書院）
Lakoff, G. (1987) *Women, fire, and dangerous things*: What categories reveal about the mind. University of Chicago Press.［池上嘉彦・川上賀作他訳（一九九三）『認知意味論』紀伊国屋書店］
Lakoff, G. & Johnson, M. (1980) *Metaphors we live by*. University of Chicago Press.［渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸（訳）（一九八六）『レトリックと人生』大修館書店］
中本敬子（二〇〇〇）「上下の方向付けメタファーに関する実験的検討：ストループ的課題を用いて」（『心理学研究』七一巻、四〇八―四一四頁）
中本敬子・楠見　孝（二〇〇四）「比喩材料文の心理的特性と分類：基準表作成の試み」（『読書科学』四八巻、一―一〇頁）
Ortony, A. (1979b) Beyond literal similarity. Psychological Review, 86,161-180.
瀬戸賢一（一九八六）『レトリックの宇宙』（海鳴社）
平　知宏・楠見　孝（二〇〇四）「概念比喩の慣用性が文章読解過程に及ぼす影響」（『日本認知言語学会第五回記念大会Conference Handbook』四九―五二頁）

（くすみ・たかし　京都大学教育学研究科助教授）